

序

本叢書は、高等教育教授システム開発センターの「授業参観プロジェクト」の成果報告書である。

授業参観プロジェクトは昨年度発足し、京都大学の全ての学部の授業を、延べ90時間をこえて参加観察した。その結果、学部学科や専門領域を越えて授業を記述するカテゴリーを取りだし、そのカテゴリーで各授業を記述することで、全学共通科目、理科系専門科目、文科系専門科目の大まかな特徴を知ることができた。また個々の授業の特徴についても記述することができた。（「京都大学高等教育叢書11」参照）。さらに学生が授業終了時に書く「授業リフレクションシート」の内容分析から、それぞれの授業における学生の学びを記述し、それが上述のカテゴリーで記述された授業の特徴とどう対応するかを調査した。（「高等教育研究7号」参照）

昨年度の授業参観プロジェクトは、少数の例外はあるが、基本的には1回の参加観察であった。できるだけ多様な学部学科の授業を観察することで、学部学科や授業内容を横断した大学授業の記述カテゴリーの開発とその妥当性の検討に研究の焦点をあてていたからである。

本年度は、昨年度の方式を一部継続しつつ、昨年度の参加観察の対象となった授業の中から文科系専門科目1、理科系専門科目1、学部共通基礎科目1をピックアップし、その全時間を継続観察することで、大学授業の構成と展開およびそこにおける学生の学びの変容に焦点を当てて研究を行った。

第1章は、理科系専門科目を対象に、授業の全過程を授業者の意識変容を中心に追跡した研究報告である。すなわち「授業構想メモ」の作成、学生による「授業リフレクションシート」からのフィードバック情報の取りだし、「授業振り返りメモ」の作成、次時の「授業構想メモ」の作成といったサイクルを毎時間繰り返すことで、「授業構想メモ」や「授業振り返りメモ」の内容がどのように変容していくのか、それに対応する「授業リフレクションシート」に記載された学生の学びにどのような変容が見られるのかを調査した事例研究である。

第2章は、総合人間学部の教官の対論を組み入れたリレー式学部共通基礎科目「総合人間学を求めて」の分析である。この科目は総合人間学部の小田伸午助教授がコーディネーターになって「知の越境」をテーマに企画された。本稿は、学生の毎回の授業後の感想および中間レポート、終了時レポートの内容を分析することで、各回の授業の特徴を明らかにし、また、全回を通した学生の学びの変容を調査した。学生が何を学んだかという視点から「知の越境」という講義テーマを検証し、合わせてリレー式講義の意義と問題点について検討している。

第3章では第2章と同様、「総合人間学を求めて」の分析であるが、切り口を授業における「学生の経験世界」にしている。総合人間学部の学生は絶えず「総合人間学って何？」と問われ、「一般教養みたいだ」と評される中で、総合人間学部の学生としてのアイデンティティーを探し求めている。本稿は学部共通基礎科目「総合人間学を求めて」の中における学生の意識変容を追うことで、この科目の構成と展開が学生のアイデンティティーの確立に寄与しているかどうかを検討している。

第4章は、法学部「東洋法史」の一年間にわたる授業の授業者自身による実践研究報告である。学生が授業終了時に書いて提出する「授業リフレクションシート」の内容をもとに授業の理解を確かめ、同時に次の授業のための情報（フィードフォワード情報）を取り出すというサイクルを繰り返す中で得られた、受講学生や授業の構成についての知見を報告している。授業者の内面過程の報告を取り入れ、大学の授業はどのように構成され、展開されるのかを記述した事例研究である。

「資料編」は「授業の参加観察に関わる座談会Ⅱ」である。これは昨年度に引き続いての企画で、「授業参観プロジェクト」に関わっていただいた教官諸氏に、本学の学生について、授業について、FDおよび大学改革について、および授業参観プロジェクトや高等教育教授システム開発センターの在り方について自由に討議していただくものである。全学共通科目を担当の先生、理科系専門科目を担当の先生、文科系専門科目を担当の先生、研究所から出向し授業を担当されている先生など、様々な立場から御発言いただいた。この座談会の中でのご意見を参考に、今後の大学における授業研究、FD、高等教育教授システム開発センターの役割等について課題化し、今後の研究及び事業に生かして生きたい。

本叢書の刊行費用の一部は平成13年度教育改善推進費（学長裁量経費）（プロジェクト課題：大学授業の参加観察によるFDの組織化）を充てている。記して感謝申し上げる次第である

高等教育教授システム開発センター教授

藤 岡 完 治